和朝

今昔物語

巻之三

世俗部

今昔物語 侍部 三 目録

○世俗傳

一 延喜帝伊勢国伊勢御息所讀和歌語
二 敦忠中納言南殿桜後和奇語
三 公任大納言後冷泉和奇語 付白川家後和奇語
四 為京實方朝臣陸奥国後和奇語
五 紀前守源道濟家人妻寂蓮後和歌語
六 伊勢守息所幼時後和奇語
七 元良親王後和奇語
八 大江匡衡賜實方和奇語

九曜文庫

今昔物語 巻卅 三

○世俗傳

一 延喜帝御屏風伊勢御息所歌和哥語

今いまは延喜天皇のおほんみかどの御屏風をはくせるに、その色紙形に、書かせ給ひ、歌どもかき給ひけり。その色紙形に、書かせ給ひ、歌どもかき給ひけり。橘姓。正四位下内蔵頭兼前守大宰大貳葛絃子

今昔物語○和朝卷三

道風をりてゆきて。ぜ所の歌をよむ。天皇
これいうまをめ。今日ふりていぬるよ雨ふるら
ふとぞきと作りまして。ぞ所伊衡（従四位下参議右中将敏行子）をいと厳上人みちかね
うて宵ゐる紙をとく作りまていく。只今伊勢
御息所のりふ行くうゑるをんゐる。ぜ所後
て被遣をんゆとつるをしやわ。ぜ御使よ伊衡
をゆいさるくいかるちかけるぞ。ぞひ
すれさ人柄をしべ御息所もぞ。ぞいるぞさい
思ふうとをくびぜ出されるなるぞ。ぜ御息所い。

きいるく物のよにくゆるる。大和守菅原忠房
ゆいよ人乃ひとあちう（按此説甚非。系圖曰伊勢御息所。始七條后宮女房後寛平法皇御息所。伊勢物語作者。父内麿三代孫伊勢守藤原藤蔭）
御時うまてあるれべ。天皇いみくと紀ゆきぞ
し知て御息所よもおされるなり（伊勢家集曰文ばりをのこして）
ゐるみぞやちーつひいる。さて御こえ公うまるるぞ
ようるるとこえこいるるのるやとつよとるて。ぞるーいきさ
きのるやうさるいるる。御ことみこい行明親王なり。新拾遺集曰伊勢
がかるるの命よれるーまて。梅のえべたもとびつまをさせゆいる。亭子院
梅乃るる香ゐるよのるーびちるいるるるみてゐるる
御きぞるる梅とるよ御いと機図者也那ゐあり。ゆくちちるだ
せちるけるめ。御ーくいみーるるるる。和ゐと後るは。
るのとるる乃影恒要るよ御ーるるるぞるる。

亭子院の法師よをのがれて大内とて入ぬる。
物うく入て。おこがましを捨てなれば 後撰集に曰。亭子院の法師
徽殿の壁にかきつけ侍ける。
るはいかゞ思ひよみ侍りけるとぞ。
おもひてゆきめぐりてもなどゝうんぞうんぞ何のるまし 法師身をもて世の中をとさまくに
わびえて家にかへりて居るなりけり。物よこれて
て内侵のうてぐを物ひ出されてりのあれるり
くるふ門のうれ前退の音して。寝姿なる人
入来れたりよりあるうんと物しくこれば。伊衡
かわるりぬ。わるひけどいてくるやしておいて人して
問しめるに。伊衡。法師身不の家に入ぬるふ。

立系浸なる所なり。庭の木どもきはめて木繁く。お
載つみて。おくく植たり。花を苔まさりて
るる。三月ばかりの事なれば。前栽ども花いくばく
えたり。寝殿の南物してよ。帽額の簾どもぐ
垂て。祭ばかり伊衡中門の脇の廊に立
る。人をもつて内の法師使て。伊衡とて
ちんまりやいくをそれば。ろき侍出来ぬ。
方ついをもくとつくぐ。寝殿の南面よりあ
て居たる内ぬ。ふるばかる女房ども多て。内に入を
ありて簾をうちくれば。母屋の簾いかに

ふ。打未那の几帳乃きよげなる。こ間ぐらゐみ
剛て。あてゝう。あ乎こ間ぐらゐ去て。四人乃屋
風の中納ゝ言ゝ。母屋の簾ゝ剛て。ゐる簾
端乃ゝ畳紙ゝ。そのゝ上ゝ唐綾の茵ゝ。
板敷の上ゝ。ゐてゝ。硯ゝ。紙のゝ。
うはゝてゝ。屋乃ゝ。ふゝ。神ゝ。
奇て茵乃ゝ上ゝ居ゝ。れゝ。内ゝ。
ひゝ。ふゝ。ゝ。のゝ。
なる女房乃額ゝ。こゝ人ゝ簾ゝ
すゝ。簾乃ゝ。ゝ。ゝ。

ゝ。簾のゝ。ゝ。内の作ゝ。
文の作ゝ。ゝ。屏風ゝ。ゝ。
料ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

いとまうまれ作てまゐる。ゆゑいうくべき事ゆゑ
わらびとりつゝ食ひ。けうとい氣しるく。
花敷つゝて有わう。伊衡これをゆゑて世よいうは
人も有をうとをつて。きびしづりわれびいつゝし
き童女乃紅衫をつゝむ。紙もつて籠れ内
ちゝ出く。絵かゝく方盤つゝ。盞をとゝをつて
ちゝ出ゝうゝ。女房童絵よ蒔ゝう硯乃名かん
蓋てゝきしげなる蒔絵を彫く。束菓子を入て。
さゝかゝう酒をとゝめうれば。盞を取上ゝうゝ。
童紙をゝうて酒と入る。ゆかゝとゝびゝ。おさへ

童入ゝう。酒のしゝ初ゝうちゝ。ゆゝまゝいゝまゝし。
飲て盞と取しとすゝふ。そびくきちゝまびゆゝ
などゝう飲く。盞と取ゝ。籠の下ゝう。盞紙さ
ゝ出て。み飲べきゝとゝいゝ。辞をれども。きゝう
ゝちゝうゝ。そびくのゝ。大よ辞ゝう。女房
きゝ物をゝうゝ。赤ゝう影つき。桜乃ゝれゝ
ゝうひゝて。ゝうゝはくゝ。行久ゝくゝて後。
ゝうゝの蒔絵ゝ。硯とゝくゝもゝびて。月色の
うすゝゝいゝくゝ。女乃特裝束紙。具して押ゝ
ゝう。赤色のかさゝ乃唐衣地摺乃裳。流蒔ゝう。

物ども、いろいろきいかせてきこえふいみじ。かやしいうまね
るすうれとうしてぞうとてそうこちね。女房ども少将乃
出る紙入れなくうてやはるこうぎうれ門をか
てかくれまでえるふ。あやめこうこうろとぐさ
さ紙やうかうけくし。車の中のかしもゆえどうね
きびいてくあとれうかげうえて。居うし菌のうう
香をたんうき幼地して取去ぐくかわえうう。
かくて西ういかねいまうわやくやく入して又を
さとあつよ。殿上口の方うお迎乃者して来れば
ちてみまうくうとうとをびべ。疾くくと作うふ道風い。

筆を濡しぬうきて清よ作よ。きうこうこうよ。
伊勢物紙入うとて来う。殿上の戸あけうして被物
をび出くく。文ともうまくくをふ。天皇こうしをひ
らきき清よどうふつんくくういくくを出て。道風
が出くうて。やくくびこうやき清よの歌う
散ちぬきうぬかりき紙うるちの松てうくるをわいまん
天皇こうしをき清よでて。月出てこうをうふ清よは作
上き紙殿上人出うこうしはうこうしてうあいをうれば。
やうき数ども紙よんうう。俳どうふつうくゆゆる
うとうざうれうそびくく俳どて後ようしう。道風出

ぬるまつれば沖邊所いつみ〜責領使ありけり語

はまゝえふとちり

二　敦忠中納言南殿櫻後和歌詞

今はしの小野宮右大臣　實頼公太政大臣忠平公嫡子　たゞよ

てれくしけるとゝ。三月中旬のころ。公ゝ。よりつゝ。

門ゝ。柳ゝ。陣ゝ。ふ。ゆくゝゝ。ふ。上達部二

三人ばかり參給て。南殿乃清涼殿の

櫻の木大ゝふ。神さびく。鬱ゝ。枝ゝ。をさまでと

ゆゝしいてゝ。はくゝ。ちゝえて。風ゝ。ふれゝゝ。

清ゝ。ふくらゝ。ゆゝ。水乃浪ゝ。の極ゝ。ゝ入ゝ。

と。大臣鬱ゝ。やゝ。ゆゝ。

曰。土御門權中納言經通者。權中納言懷平之子也。經通子。又下文。以權中納言敦忠混土御門中納言者。經通歟。經季歟。未審。蓋此誤乃系圖

やゝ。の。ゝ。ゝ。ふ。げ。ゝ。ふ。上達部れを追ゝ。

ゝ人をたゝびおとゝれ。ゝ。ゝ。ゝ。

けまべ。土御門權中納言の。ゝ。ゝ。

ゝれば。大臣ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

と。大臣ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

大たいこうばかりそこなひてゆくゑをしらずなりぬ。中納言
ものうしとおもひ給ふ。大たいは高野へ行ときこえあり
しる人あれども。ゆくへをしらずなりぬ。あるじ
と面をかくしたりいとやうなるべし。
ちうとして。なんこれをさんのかくさるべき事とぞ
さんも。後なりべとおもひ給へかくそ。
なんゆとも
とのもりれこのやどにあるべきはまだうあさぎあるれ
大たいこれときこゆいてゆかんいてゆ返
しやすくうるいぶくれたるまうさんいさきのすべ。

ゆさうん事いかりべきみあるべ。古歌とゆうだべきそ
ゆきのぶ忠房 右京大夫従四位上信濃守興嗣男 ゆくそ。後ろ
ある方紙なんゆうろうしろる。此歌未考 此中納言は。
本院大たい 藤原時平 時 乃在原れ少方 在原業平孫而棟梁女娘國経妻後時平奪之為室 此説大非。
生敦忠 みうゆをもつるるなりゆ。年いかだりにて
系圖曰敦忠天暦六年三月七日薨年二十八
あるもの人がもよりけるべ。せ乃世がえもそ
やうふくなゆ。名をば敦忠ぞいひる。又本院
中納言もいひうゆ。和言とし。ゆよすぐれ
ゆうゆ。ゆ紙ゆ出てれべ。みくせ

[illegible]

三　公任大納言後法興和尚語　松尾川家後和尚語

人々いとしたしう六代一條院の御ほう。上東門院　関白
道長公女子彰子　はゝうえ問ひ給ふ。おもしろくせさせ給ふ。色のようむ料よ。歌後
どもに作をまいて。方々みくまれとあり。ふ。
四月ゆ　義孝のうけくさて。後に書
さうゝ帖。公任大納言　四條權大納言。從一位　関白太政大臣頼忠男　あて
つて後のひゝるぶすでよ。其日ゆ。ちうて。人くの歌
い。皆もちまうゝうとゝれ。大納言おそくまう

ゆひくれば使ともうて。御ものとて。関白殿よりを
まいくいつゝいされゝるゆ。行成大納を　正二位權大納言右少將義孝男　とは和方と書べさんうて。疾まくゆ。屏風
を結りて書べさう。ゆのひくれべつゝく立居
もちひびゆひゝるかどん。大納言まうゆへ。後
どもゆのけうくまく。歌もよみいでゝ。まうを
ゝとは大納言ゆ方へ。はまるおきゆいゆ。
ゆく。皆人ゆゝをゝひゝりゝるゆ。御ゆ。まう
ゆやゆとゝと殿いふ。方ゆ御をゝと作を
帝ゆ大納をけうくまゝ。ゆまくゆ。ゆまうゆ

ほうかいてきりくらんいぱきくさんいかりくさの傘
なり。其中にも紙袋どもの
ぬかりをもぬぐものけうくもてあつめとりれ
て作りをいに公任ぬかぐくめるいべしとついてか
くいあんくれぐも。殿ちくいの方いぱをてもあり
なを。其清紙をくいとぐくを紙形をもれぐ
ぬぐきりやうめをもをんれいぱ大納言いみ
く作りぐれぱくびいぱ。ぬしくの方ちん出ぐ
くれよこを作りを中にに永任をこをくこをひ
作るめがくきしのあやなるを後くいべいと

紙ゆうめ作ぱぐぐこうくみ揃ぐ作べぱゆして
公任いよんぬ得さるも理たりぱ。ゆうをすべ
とぐぬぐみのうきべぐ。殿ちくにやあさ
べ大納をおひまづくして思い長さみるれ
やいいてふくこうち陸奥紙より半ち方紙取
出し。殿よりうべ。殿これをくく清前ち垂
ゆうぱ清ゆれた大臣宮治殿 道長公嫡男頼通公後太政大臣摂政従一位
同二條大臣殿 道長公三男教通公後関白太政大臣従一位 ちけぐ先て。
くこぐくの上業殿上人は大納をいを今ちにゆえ
なくいぬち信いぐぬをくゆくいて。陰国乃

大納言殿とにひきてゆくゆくに落人をしひきて
月さいぐみ。殿をを為ゆくして後とまつ所に
ひとりのもとぐゆる義の花いつるゆぐのもるめん
そこばくの人落これをゆめて。胸を為れてつみどと
わたのだうくう。大納言殿人くれ落つるとこひ
る氣色みぐ。今は猶い落ぐ。殿ひ
しまへぶ。大納言いよるぐみる落ゆんぐるゆう
くる申れも。和ひしてぐ。ぱ〇小自歌
しまひくうぐまんうぐ落つえぐるぐなり
又公任卿のぐうの川の表ひ落まひくるぬぐうの

ぶべき殿上人ゆまの人ぐうの行く花のつみくぐ
ぐ。月よ来ぬ落ゆまりゆやひくれぐ酒ぐすあそ
わそびぐるに大納言
きぐそ人ぐひくるぐ童い花をゆぐのるぐゆられ
殿上人ぐぐこれをきてつくぐぐよるけまぐも。
これは仰ぐくゆまるぐ。ぱ大納言殿のこ
條左殿大ぐうゆまひぐぐぬぬ九月中旬ぐわ
月の明くるぬ。花ゆけゆく稚ぐ。花をゆわ
て居ぐうゆまん。侍の方ぐ酒ぐうれと人
ぐいくるぐきて大納言

いふ事なくて涼しくされてあそびけるに秋のよなれば
やよみさりけるを。又此大納言九月なかの月のさやかなる
まへりける歌人々よみける
すむ月もいてもすゑ世中にかはらぬ秋の夜の月
公任宰相中将にておはしけるに志のふべき上達部
殿上人あまた具してあそびにいでたまふ。大井川より
て。あそびけるに。みな堀川よりたはふれて帰りけるを
おくよみける
おほかたにみちをこえれば大井川いせき秋にはまさるかな
此大納言の母とは二條殿の北方

二條教通既註于前 北方公任姉子

太政大臣信長公母 にそおはしける。雪ふかかりける朝。清行がり
まかり
隆家は見てまいで積りたるいづこたかくあかぬ波さうろふと
此大納言世の中ならひみなく。蟄居しけるとき。
八重菊みてよみける
をりみてさく白菊は咲きみだれ花のさかりをなくてか
世の中をうしとおもへるなかのみ公任かく
よみたまへり
たいしたる人もある世の中にいかをばとてすぐせよ
関白殿の大饗にわたくしありておもひける屏風の絵にか

ゐうしんかまうらうをあらそふてくるをそ
よりんあら
ものみぐるしくちうちんあらそひ
かくのごとくなる和尚とのみまくるよ
しておいてくるとなんいひうはさしてあり
四　義家實方朝臣陸奥國後和尚語
今いまむかし義家實方朝臣といふ人有きとぞ一
條大將濟時濟當作定大納言のもとなりし一條院の御
ときに左近中將にて殿上人にそありけるがさひ
けど陸奥守に成くだりきるに　古事談曰

一條院の御ときに実方と行成と殿上にて行成の間実方行成の冠を取て小庭になげもつ行成さいぐ乱たく静まる殿司と呼て冠取れよせ給へていくたの道りおくする公卿殿上人ふ都より御笠して行成いたつべきものなりとて殿人所よ猶せ給へ実方とび出給ひて陸奥守に任ぜらる

右近中将源宣方朝臣やもいひ
ものゝ人いたく重信 敦實親王二男 のゝしり給ふ実方と共に
り禁中にものもいはれ給ひて。宣方をいとよいしてき
いわるゝ物云ひてわるきものふようて。実方をあくく
けれて陸奥国へくだりて。のち宣方
のゝしみ。かくなんいひたりける
やまとなでしこ東路にあるなるの松てふ所関
又道信中将といふ人て。実方とうぎりをなん物云

うて内裏をゝ。九月ばかりに行幸あるべきよゆへんと奏
しゝ。左近衛中将ひとけどもせてそれば。実方あくれば
中将なくて。泣くいとうでたるを
見てこの人のいとれ涙おとしてひとりあけさ秋の夜なる
道信の恒徳公のもとにまゐりたまへるに。実方中将さ
ゝりわくれてぐぎりれて。ちひとわくてぬねくて
衣の袖より。真ちぐ紙ひてさあく後うくん
うくねのみよの袖のうちにまゐりたまへるに物
やいてうれわくて。書うて。陸奥守にまうて。其
国へくうて。一書曰。実方三年の間。名所のことをたずねて。
の古歌のわたぐのうくるぞまちく陸奥国へ

こそあると定しうとてちてかへることぞ向ふれども和かるるそのも
なくぞ〳〵ゆく人もなかりきかりしぞなびてやさしひゆきなる猶
り。ひとつの歌翁よあなり。実方をうらみていひなるは。源氏は物すし
きる人よこれ物すきまし。何事をうけさうかとふ。おとこやの松さ
さなる様うるとこゝゑなれバ。歌翁ゆきて。いと情ぞ作りこれやこ
の　みちのくのおくやの松の本ぞうれよいかゞべき月の出るなり卯
とつかすゆりしけるを物をかひいそぎはく。こやてよりけるかごとなれば
くぐりかつるやとらへバ実方されてこそとらふ翁いそく。陸奥出羽
一国まで作しとれてこそ。みちのくとよみ入れバ国々よりれてなれ
出羽よ作りかかりの国より物うしてもぞみのまへと申されバ出羽より
越ゆく阿古耶の松をも見てかへりなるの歌翁といひなるは塩竈
大明神とぞ定えし。今ゆかれあ和歌とりしてものゝをされども。
勅免はなかりけるに◯東斎随筆曰。実方奥州よありしに。賀
州よは菖蒲なきん水草はかれどもなしてそ。五月五日よ。うきとふ
きをまうぞきより国のかみひとなりて。うつ歌ゆととい〳〵◯
新千載集曰。みちのくふかくぶり作りかるとれ。おお大納言公任のもと
よりおくりつかはすとて。そこの何歌ながらやゆといつりまる。
返すれ実方。ちくげてん見るやこゝのろくゆく月よ本の下くるをえ
今ぞ後　三年やといふなけるおくうかせなるしれバおくれ
どふ心

なりし事。後にしれうきられし　新千載集曰。みちのくふかくは
うきまろ。路中れやれとりさま
あるけるの作りたる歌ぞいせ作りなれバこれあん中将のたるやとて
ふくなれバ中将といづまの人ぞとさひ作りなれバ。実方朝臣の事と
ちんやけるみ。冬のあすそ。宮枯のすききのぐやみてかりてぞなり
ふしきのかれくゆかえ作りなれはよろ　西行法師　くちもきねるの
名えぞるぞとどめ置くうれの　その名れ朝臣ときわ　とひし人も。
すゑありるるんとりぞみえれ
和歌の上手にくありかるとぞいんかくりつたえたるとや

五　筑前守源道済侍女家後詠和歌語

今はむかし筑前守源道済　筑前守正五位下。能登守方国男　といふ
人ありて和歌をよむてよ名あんきはやかりける。ひと国
りくぐりてなりきる間り。亡りひとりの男。京より
年ごろの妻と具して任国へくだりぬ。ほどなくの女忘くゑる

いくつもまに成ぬれば。妻くさぐさはぐくみて。妻をばわれよりも。をとこの妻い。樵の家にてすぐさうとも思ひえさうもれば。妻人とふいくるゆゑ。のの人の家のおのがんこはあてがらくい。けまでも。妻と耳にもゆゑ入ど。女がはらとと潮裏をぐに足ざりぬ。おのが家にいりこの妻を亀ゑ。今の妻がもふ侍はしぬ。をくある程ぬ。この妻ひとをげにて病つきにぬ。そばにつきていさるものにていと。京より奥しうまる女童

ひとりをんなをまる。おくに病して御ようを男が祈よりひたいしうれども。関もいれど。男は紙へ行くすでおうぎりみ家をれば。おれよもうんをたる樵のそうて。ぶんどること紙うれして。物をゆがえねもちちをぐ。潮よ久と書く。女童をもうて。男のりふたりつと。女童宇乃鏡にりら紙ぬる紙。男とるとそうちるんく。返るもつはさばしてぬるきはくだういいてぬのちいこのもいえざりぬれば。女童をいまびてうんぬぬ。もこは男乃同僚なる士ぬとて墨ぬる妻が物こ紙。

何とかくこうとてこれにかく書こう

こんなれつともあるぬ 一書おきどころを見 唐の男いもばしを

ものこうやうれと 一書曰。吉田中納言経光卿宰の帥

よりう。絵ばかり下向のくさ。妻女を

けてこうの品乃女を出。妻女をけまんこえに こんりゐ神さま

みさはるれ男いもばしもこのくやうれとよみくもあくあるて

ひ侍これをみくに情あるものてあくれなこと

うもうぎりれ。ひさしさのあまりに。主乃道濃よ

ひとをうんをこれが。寄これをみくどのにあくれな

ぬがえく。男紙よじくこれいうるる事ぞと問。

男かくとものをはどてあくまとこうとくこう。

寄ゆめて。海い人よいあるざりくこてのの妻が許

こう人をゆりてそこうひさせくれば。女いをゆりて女

者が帰る紙もちつまびくてもあくまれこうこう。

使こうてこうほうとに寄ゆさけある人りてが

ぎうかくわこれがるて。ぞ紙ものの付紙をて。

我海を手法不使こうゆりいてはこひこて。今い

うぎうなくこうやくれ海ていあくぎう

つこうこうて鎖の使をもつく。岡のさういと追ゆ

しきう。かくて死こう妻が者こう人をはこいして。

見ぐれこうあゆいこうこうくさせ。侍ものどよびせゆ。

後のつぎなどもぞいくるまをくこう。まの侍いかの

妻がりこれもよせざりけまべとぶきうとわくて。人
の家みのがりくる新しのうてよりくるしとも。一巻
のそくらくもあるもくれば。あるあゆーさ鞍うて。い
ばくくもなく失いくうとんぐうつくえてくるも也

六　伊勢御息所幼時侯和奇語

そいそくく伊勢御息所あいくぐ七条后の御仲み
作しくくる比。枇杷大臣藤原仲平かるうて宮きるうぎ
のびてかしいくるしくる紙。かくくくくれど人時きう
てくうぐのちかるかしいあつどくとあるもくれ
べかくくみくるんゆうくるきう　伊勢

人きれど後宮かいつびつまあ紙みぐとぐかいくあ物と
かるこれをみくかくれよ物しいきしいくんぐのちいあ
らいてかしいきしいくうくとんぐうつくくくる也
考よ新千載集よ。女よつついける　枇杷大臣かくきあのくと
の下羊水くれてちくまく云いすびくるくう　返し　伊勢　元
ぐくれくるぐくうれちくさいあぐくらびくも物かゆうくれ。
くくくくびくくの行めべく。びれ伊勢宮文帝の御あくあくて。
樓文を
まくくう

七　元良親王侯和奇語

今はしく。陽成院乃御子。元良親王と云人
れくくくう。つみくきあるれば。世くうあう
女乃父藤ちくときこゆるば。命くくくもいまぐあい

ざるもはべりて文をとる紙もつくりはべりてしくり。
そのころ枇杷の大臣の沙汰よ。女童あり。その紙
岩藤といひしころ。かくしらせ給ふ風呂屋業うせ給ふ
ぐくわくうるそれば。うれさこるあさうり初んごろ
うりいひそれば。きろざうくるあば。ある人きさうり
ふ白紙にくして。俤借しければ。辞しがくる事
今ふくうそみちいは山男。きのびくに大れぬ氣
乃屋うりかしくる。元良いこれをきうびてうの
女れいたくしき由紙ゆメて。そびくいくをくれば。
男あるとはいそびくつきれく返事をぞみ

世ざりければ親はうくれんいやうのいろ
はかりそこにたちゆきもけれどもはれをとこを
女返し
いとをしみよ。。ところをさまざまどうよびとめべんてをかれら
式親王はのりあつとも
はくこえうもちり
八大江匡衡賀方和歌詩
人いもしき式部大輔大江匡衡 弾正少弼従四位下。左京大夫重光男
とつ人のきさうにたまはせ。式匡衡。後京
寒方朝臣乃。陸奥守なりけるの国よりぐ

つてあつまりこれ。匡衡くるまん待てゆりる
都よりこれを思いとしいとみるこれ人に書紙をかり
寒方朝臣これをよく。宮てうんしわりをぞ
どもるまこれびうはうこ
和歌 ひとまあ人のやにいはとれ
わかれまうんこれなるふまつやや
とぐれうのこをしび。和歌
やちんこうはこえうり

今昔物語三